慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ある名演奏家の生涯の素描（Ｉ）
Sub Title	Charles Barbra : «Esquisse de la vie d'un vitruose» (Ｉ) (traduction japonaise avec notes et présentation)
Author	Barbara, Charles(Kameya Nori) 亀谷, 乃里
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.36 (2003. 3) ,p.134(1)- 110(25)
JaLC DOI	
Abstract	ある名演奏家の生涯の素描(1)シャルル・ 亀谷 乃里バ ル訳バラ 作・ 解説解説 シャルル・ バルバラは一八一七年オルレアンで楽器製造業を営むドイツ生れの父とオルレアン生れの母との 間に生れた。↑)兄は後にピアニスト、オルガニストで、かつ作曲家となり、三弟はピアノ調律師となる。(三シ ャルルはこうしたいわば音楽的風土に育った。若くしてパリに出た彼はボードレールと同じルイ・ ル・ グランコンセルヴァトワ ル 中学校で学業を終え、一時はパリ音楽院で勉強したこともあった。三自然科学に強い関心をもっていた エコ ル ポリテクニック 彼は理工科学校に学ぼうと考えていたが、(5)文学を聖域と考え、転じてその道に身を投じた。(、)アンリこ、ヽ ホ エ ム ユルジェールの「放浪芸術家の生活情景」にカロリュス・ バルブミュッシュ〔9『。一⊆。・ 口コ碧げ。詈魯ρσ㊤ひ。(ひげ) とσ碧9お(粗野な)とをかけ、∋⊆魯o(若い娘に声もかけられない恥ずかしがり屋の青年)とで合成した名前〕という滑稽 な名前で登場するのはシャルル・ バルバラ彼自身である。(ヱしかし当時バルバラはひげもなければ粗野でも四 なかった。彼は孤独で極端に非社交的で、仲間内でも黙って耳を傾け、ポケットからノートを取り出してはメ□133(2)モを取っていた、とシャンフルリは回想している。〔、) ロマン主義から自然主義への移行期の芸術家達、シャンフルリ、ミュルジェール、哲学者のジャン・ ヴァロン、画家のクールベなど自称レアリスト達の集まったグループ〈ラ・ ボエーム〉にバルバラが受け入れられたのは一八四一年の暮である。(,)彼らはそれまでの ロマン主義に反旗を翻し新しい道を模索していた。そうし コルセ ル コルセ ルロ サタンてその活動の中心である小新聞、『海賊』紙『海賊11悪魔』紙に寄稿し、互いに助け合った。バルバラが、『悪 ラ ル の フ ル ロラ ル カリアテデノドの華』の詩人ボードレールや〈芸術のための芸術〉の信奉者で『女像柱』の詩人バンヴィルと知り合うのもこうした中であった。〔m) 音楽は、〈ラ・ ボエーム〉での重要な活動領域であった。優れたヴァイオリン奏者であったバルバラは第一ヴァイオリン、シャンフルリはセロ、画家のアレクサンドル・ シャンヌガヴィオラ、後にリリック座のヴァイ グリセノトオリン奏者となるオリヴィエ・ メトラが第二ヴァイオリンを受け持ち、この四重奏団は学生や女 エ を前にコンサートを催したこともあった。(H)バルバラの音楽活動はシャンフルリの『若き日の回想と肖像』(E)や「サン・ ルイ島の四重奏団」、(B)「シュニゼルの三重奏」(回)等に詳しく述べられている。絵画的素養はあったものの、音楽の分野ではこれといって教育を受けていなかったボードレールが初めて音楽に親しんだのも、親友であったバルバラとその周囲に集まった音楽をする人達の中であった。(垣バルバラの作品はしばしば、多様な音楽的要素を含み、音楽的情感と感動に浸透されている。(博)ちなみにワーグナーのパリ初演(一八六〇)に際して書かれたシャンフルリのワーグナー論はバルバラに献じられている。(7) バルバラの文学の領域でのデビューは一八四四年のπ轜粒邸一だと考えてよい。(侶)この年には一八四六年 コルセルに『海賊」紙に発表することになる贋金造りの物語で探偵小説の先駆をなす「ロマンゾフ」がすでに書き上げられる。〔円)その後「カーテン」(一八四六)等幾

	編かの朗、癌.醒，でかつ心理的な短篇を『却術須』誌に発表^20)□132(3)ある名演奏家の生涯の素描(1)した後、一八四八年の革命の頃には故郷のオルレアンのいくつかの新聞編集に携わりなが舷む自らの作品やパ リの友人達の作品、それに工ドガー・ ボーの作品の翻訳{2)を掲載する。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20030331-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある名演奏家の生涯の素描（I）

シャルル・バルバラ 作
亀谷 乃里 訳・解説

解説

シャルル・バルバラは一八一七年オルレアンで楽器製造業を営むドイツ生れの父とオルレアン生れの母との間に生れた。(1) 兄は後にピアニスト、オルガニストで、かつ作曲家となり、(2) 弟はピアノ調律師となる。(3) シャルルはこうしたいわば音楽的風土に育った。若くしてパリに出た彼はボードレールと同じルイ・ル・グラン中学校で学業を終え、一時はパリ音楽院（コンセルヴァトワール）で勉強したこともあった。(4) 自然科学に強い関心をもっていた彼は理工科学校（エコール・ポリテクニック）に学ぼうと考えていたが、(5) 文学を聖域と考え、転じてその道に身を投じた。(6) アンリ・ミュルジェールの「放浪芸術家（ボエーム）の生活情景」にカロリュス・バルブミュッシュ〔Carolus Barbemuche, barbe（ひげ）と barbare（粗野な）とをかけ、muche（若い娘に声もかけられない恥ずかしがり屋の青年）とで合成した名前〕という滑稽な名前で登場するのはシャルル・バルバラ彼自身である。(7) しかし当時バルバラはひげもなければ粗野でもなかった。彼は孤独で極端に非社交的で、仲間内でも黙って耳を傾け、ポケットからノートを取り出してはメ

モを取っていた、とシャンフルリは回想している。(8)

ロマン主義から自然主義への移行期の芸術家達、シャンフルリ、ミュルジェール、哲学者のジャン・ヴァロン、画家のクールベなど自称レアリスト達の集まったグループ〈ラ・ボエーム〉にバルバラが受け入れられたのは一八四一年の暮である。(9) 彼らはそれまでのロマン主義に反旗を翻し新しい道を模索していた。そうしてその活動の中心である小新聞、『海賊（コルセール）』紙『海賊（コルセール）＝悪魔（サタン）』紙に寄稿し、互いに助け合った。バルバラが、『悪の華』の詩人ボードレールや〈芸術のための芸術（ラール・プール・ラール）〉の信奉者で『女像柱（カリアティッド）』の詩人バンヴィルと知り合うのもこうした中であった。(10)

音楽は、〈ラ・ボエーム〉での重要な活動領域であった。優れたヴァイオリン奏者であったバルバラは第一ヴァイオリン、シャンフルリはセロ、画家のアレクサンドル・シャンヌがヴィオラ、後にリリック座のヴァイオリン奏者となるオリヴィエ・メトラが第二ヴァイオリンを受け持ち、この四重奏団は学生や女工（グリゼット）を前にコンサートを催したこともあった。(11) バルバラの音楽活動はシャンフルリの『若き日の回想と肖像』(12)や「サン・ルイ島の四重奏団」、(13)「シュニゼルの三重奏」(14)等に詳しく述べられている。絵画的素養はあったものの、音楽の分野ではこれといって教育を受けていなかったボードレールが初めて音楽に親しんだのも、親友であったバルバラとその周囲に集まった音楽をする人達の中であった。(15) バルバラの作品はしばしば、多様な音楽的要素を含み、音楽的情感と感動に浸透されている。(16) ちなみにワーグナーのパリ初演（一八六〇）に際して書かれたシャンフルリのワーグナー論はバルバラに献じられている。(17)

バルバラの文学の領域でのデビューは一八四四年の「靴料理（プラ・ド・スリエ）」だと考えてよい。(18) この年には一八四六年に『海賊（コルセール）』紙に発表することになる贋金造りの物語で探偵小説の先駆をなす「ロマンゾフ」がすでに書き上げられる。(19) その後「カーテン」（一八四六）等幾編かの幻想的（ファンタスティック）でかつ心理的な短篇を『芸術家（ラルティスト）』誌に発表(20)

した後、一八四八年の革命の頃には故郷のオルレアンのいくつかの新聞編集に携わりながら[21]自らの作品やパリの友人達の作品、それにエドガー・ポーの作品の翻訳[22]を掲載する。

一八五〇年にはパリに戻り、次々と卓れた作品を出す。『文芸家協会』誌に、ボードレールが賞讃した短篇「エロイーズ」（一八五一）等を発表し、[23]やはりボードレールの紹介でマクシム・ドュ・カンに近づき、[24]『パリ評論』誌に中篇小説「赤い橋の殺人」（一八五五）[25]や、後に『感動的な物語集』（一八五六）[26]に収められる短篇「音楽のレッスン」（一八五四）[27]等を発表する。「赤い橋の殺人」は哲学的小説、心理小説、暗黒小説、探偵小説、モデル小説であり、様々な理由によって詩人ボードレールと深い関係をもつ作品である。『感動的な物語集』では屋根裏部屋から病院に至るまで、人々の生活にスポットライトを当てて慧眼な心理観察に基づいて内面生活を描いている。他に、一八五〇年代後半には彼の真価を体現した「ある名演奏家の生涯の素描」（一八五七）[28]や「ウィッティントン少佐」（一八五八）[29]が『フランス評論』誌に発表される。これらの多くは論理性と科学性をもちながらファンタスティックな要素がかなり強い。この時代とそれ以後には『万人の新聞』誌、[30]『フランス評論』誌、官報の『世界報知』紙の夕刊[31]等に多くの中短篇小説を発表する。これら諸作品は一八六〇年に出版される『私の精神病院』[32]や、他に数冊の単行本となって世に出る。[33]

彼はかなり遅く一八六一年に四十四才でやっと結婚し、[34]二児をもうけるが、一八六五年にパリを襲ったコレラのため、わずか数日の間に下の息子と妻とさらには義母を奪われ、三歳半の息子と共にとり残され、バルバラ自身も高熱に倒れデュブワ市立病院に運ばれるが、病の癒えかけたとき、未来の暗澹たる家庭を思い描き四階の窓から身を投げて生涯に終止符を打った。[35]一八六六年、四十九歳であった。孤独な生涯と死亡時の悲惨な諸事情のため、その後人々は彼の名を口にすることも稀になった。当時マザリンヌ図書館の館長をしていたシャルル・アスリノーや他の友人は彼の才能を認め忘却から救おうとしたが力及ばなかった。

作品に関して述べよう。先に少しふれたが、自称レアリスト達は漠然とロマン主義、理想主義に反対して、〈真実〉と〈誠実〉を標語に掲げて新しい文学を模索していた。多くの人々は客観的観察や客体の真の描写に専心した。しかし人間は写真機ではない。問題になるのは客観性よりはむしろ解釈の誠実さである。「誠実さは気質を前提とする。気質の数があるだけ誠実さの数もある。」[36]とクロード・ピショワはいう。

「ある名演奏家の生涯の素描」の作者は、一人の音楽家の理性が「失意の下に埋もれてしまったエピソード」[37]を物語る中で、「魂の例外的境遇を叙述し」、[38]鋭い観察力と精確な心理分析とによって、然るべき結果のよって来るべき原因を精査し、かつての王立音楽院（コンセルヴァトワール）の優等生が精神の廃墟となるまでを、原因と結果の連鎖を通して論理的に解明する。しかしこうした明晰な知的頭脳の下では、押し殺された滾り立つ情熱と、打ち震えるナイーブな情感と感性とが抗い難い力で溢れ出んとしている。彼にあっては熱と才能とはまさに表裏一体である。これらは当然のことながら彼の観察眼にも影響を及ぼしている一方、物語り作者（コントゥール）としてのバルバラに活き活きとした語り口を与えずにはおかない。そしてしばしば、非常に素朴で鋭い、そしてユーモアを含んだ、真実をついた言葉がダイヤモンドの閃光を放って我々に共感を抱かせるのである。

一方、この作品は当時の自称レアリストの多くに共通の特徴であるモデル小説（ロマン・ア・クレ）でもある。教育熱心で激しい一徹な性格の楽器製造人の父フェレと、偉大な音楽家に要求される強い意志もエネルギーも欠き、人のいうままにヴァイオリニストの道を進む虚弱な息子のフェレ（これは語り手の言である）、この親子はある程度バルバラ父子がモデルになっている。これについては作品翻訳の後に逐一註記するのでそれを参照して頂きたい。

「ある名演奏家の生涯の素描」は最初、一八五七年九月二十日と十月一日に『フランス評論』（ルヴュ・フランセーズ）に掲載された後、一八六〇年にアシェット社から出版された短篇集『私の精神病院』（メ・プティット・メゾン）に収められる。自らの中に狂気の種を宿しているのではないかと心配していたバルバラは当時名をはせた精神科医バイヤルジェ[39]の講義を聴いて感

銘を受け、この奇才、奇人のコレクションの短篇集を彼に献じた。参考のためこの献辞の翻訳を解説の註の末尾に掲げ、(40) 次に同じ一八六〇年版の作品を翻訳することとする。

解説の註

頻出参照資料 KAMEYA, Nori, *Un conteur méconnu, Charles Barbara 1817-1866*, Paris, Minard, 1986 には略記号 *KCB* を用いる。

1 *KCB*, pp.6-7, note 5; Acte de naissance de Louis-Charles BARBARA; Acte de mariage de Louis-Charles BARBARA; Acte de décès de Marie-Antoinette Alger （*v. KCB*, pp.247,248,253 et 254）.

2 BARBARA（Pierre-Henri）は当時ドイツで著名だったピアニト、アロイス・シュミットに師事し、若くして才能を発揮した。作曲した作品としては、「オンディーヌ」「華麗なるワルツ」「イドゥナ」など。V. FERET, Edouard, *Statistiques générales,……biographique du Département de la Gironde*, Bordeaux, p.41.

3 Acte de décès de Charles-Jacques BARBARA （*v. KCB*, p.253）.

4 一八三六年一月九日に対位法のクラスに入る。このクラスは有名な作曲家 Halévy のクラスへの準備クラスであった。また十一月二十五日にはヴァイオリンのクラス志望者リストに登録されている。Classement des Elèves.1836(Archives nationales: cote Aj^{37}88); Inscription. Aspirants aux classes. Réclamations.1834-1851(p.51) (Archives nationales: cote Aj^{37}322（5））

5 SCHANNE, Alexandre, *Souvenirs de Schaunard*, P., Charpentier, 1887, pp.192-3.

6 MURGER, Henri, *Scènes de la vie de bohème*, P., Julliard, 1964, chap. XII, pp.176-96.

7 SCHANNE, *op.cit.*, p.192.

8 *Ibid.*, p.193; CHAMPFLEURY, *Souvenirs et portraits de jeunesse*, P. Dentu, 1872/ Genève, Slatkine Reprints, 1970, p.195.

9 MURGER, *op.cit.*, chap.XII; *Trois Buveurs d'eau,Histoire de Murger…*, Paris, Hetzel, s.d.[1862], p.117.

10 *KCB*, p.10 et pp.18-19.

11 CHAMPFLEURY, *op.cit.*, pp.198-9.

12 *Ibid.*,«XXVIII Un conteur mèconn», pp.197 — 9.

13 «Le Quatuor de l'Île Saint-Louis», *Revue de Paris*, 15 oct. et 1er nov. 1854.

14 «Les Trios des Schenizelles», *Revue de Paris*, avril et mai 1852.

15 RUFF, Marcel A., *L'esprit du mal et l'esthétique baudelairienne*, p.207. KAMEYA, N.«Louis-Charles BARBARA — Un ami de Baudelaire—», *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, N°46, Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, Tokyo, 1985, p.47.

16 こうした音楽的な作品は短篇集として出版することができた。BARBARA, Charles, *Esquisse de la vie d'un Virtuose*, présentation de Nori KAMEYA, P., Viviane Hamy, 1990.

17 *Grandes figures d'hier et d'aujourd'hui*, P., Poulet Malassis et De Broise, 1861.

18 «Le Plat de souliers», *Gazette de la jeunesse*, N°31 et N°32. これまでにも二、三のエッセー風のものがあるがつまらないもので、彼の作品として取り上げるほどのものではない。

19 «Romanzoff», *Le Corsaire*, 3 et 4 sept. 1846. V. lettre à Léon Noël, *KCB*, p.185.

20 «Le Rideau», *L'Artiste*, 24 oct. 1846. バルバラの作品の bibliographie については、*KCB*, pp.215-221を参照。

21 *Le Démocrate*; *La Constitution*. 恐らくは *Le Journal du Loiret* にも一時関わっていたのではないかと推測される。*KCB*, p.22参照。

22 POE, E.A.,«Le Scarabée d'or», *Le Journal du Loiret*, 17,20,22,24 juin 1848; «Le Chat noir», *Le Démocrate*, 1er juil. 1848;«L'Assassinat de la rue Morgue» *La Constitution*, 6,7,8,11 juil. 1849.

23 «Héloïse», *Bulletin de la Société des Gens de lettres*, 15 février 1851. ボードレールは、『ボヴァリー夫人』書評の中で「エロイーズ」と「赤い橋（ポン・ルージュ）の殺人」の作者を「厳密で論理的かつ知的獲物に貪欲な魂、シャルル・バルバラ氏」が「魂の例外的状況を叙述し、解明しようと努力した」といって強い「共感」の意を表している。BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, texte établi, présenté et annoté par Cl. PICHOIS, t.II,P., Gallimard, 1976, p.79.

24 V. lettre de Baudelaire adressée à Barbara, datée du jeudi 15 juillet 1852, *KCB*, p.32.

25 «L'Assassinat du Pont-Rouge», *Revue de Paris*, 1er et 15 janvier 1855. V. *KCB*, pp.61-104. 亀谷乃里、「バルバラとボードレール」、『三田文学』、一九九〇年、二十二号、夏季号、一七二-七頁、KAMEYA,N.,«Louis-Charles Barbara— un ami de Baudelaire», *Etude de Langue et Littérature Françaises* [Tokyo], N°46, 1985, pp.36-51.

26 *Histoires émouvantes*, Michel Lévy, 1856.

27 «La Leçon de Musique», *Revue de Paris*, 15 mars1854.

28 «Esquisse de la vie d'un Virtuose», *Revue française*, 20 septembre et 1er octobre 1857.

29 «Le Major Whittington», *Revue française*, 1er février 1858.

30 *Journal pour tous*.

31 *Le Moniteur universel* du soir

32 *Mes Petites Maisons*, Hachette, 1860.

33 *Les Orages de la vie*, Hachette, 1860 ; *Ary Zang*, Hachette, 1864. 死後出版された本は *Mademoiselle de Sainte-Luce*, Librairie internationale, A.Lacroix,Verboeckhoven, 1868 ; *Un Cas de conscience…*, Librairie international, A.Lacroix, Verboeckhoven, 1868. その他詳しくは *KCB*,«Ouvrages de BARBARA ayant paru en librairie», pp.215-6を参照。

34 Acte de mariage, *KCB*, pp.248 − 9.

35 Schanne, *op. cit.*, p.195-6 ; *KCB*, pp. 46-7; Acte de décès, *KCB*, p.250.

36 PICHOIS, Cl, *Littérature française*, T.VIII :*Le Romantisme 2 :1834-1869*, P., Arthaud, 1979, p.254.

37 作品翻訳本文十二頁。

38 前出、注23を参照。

39 Jules Gabriel François BAILLARGER（1806-1891）. Ivry精神病院の医師。著作に、*Traité des hallucinations*, *Stupidité des aliénés* 他がある。またCERISEとLONGETとともに *Annales médico-psychologiques* を創刊した。（v. LAROUSSE, *Dictionnaire universel* du XIXᵉs ; PETIT ROBERT 2, *Dictionnaire universel des noms et prénoms*, 1979.）

40 献辞

バイヤルジェ医師に

拝啓

私は精神病についてのあなたの講義に出席して感動的な喜びを経験しました。ある強い魅力が注意を釘付けにするのです。そこからは閃光がほとばしり、それはときに燦然たる輝きを放って残酷になります。

あなたの言葉に魅了されながら、隣人のことがひどく心配になり、自らについては恐怖で一杯になります。あなたのお話を拝聴した後、幻覚の蜃気楼から免れつづけていられると公言する勇気のある人がいるでしょうか。セネカ（1）は書きました。「どんな優れた精神もどこかでたわむものである」と。さらに徹底して、あなたは、誰の運命にも狂気の種子が播かれていないことは稀だということを明確に教えられました。私はあなたのおっしゃることを信じざるを得ません。男性の狂人がすべてビセートル施療院に入院しているわけでもなければ、狂女すべてがサルペトリエール施療院に入院しているわけでもありません。広大な地球の表面では、幽閉されている狂人達が最も病んでいるのでもなく、最も興味のない存在だというわけでもないと主張してもあながち逆説的ではないようにさえ思われます。

ですから、この書をあなたに捧げることが途方もない誤りだというわけではありますまい。以下のいくつかの素描が浮き彫りにしようとしている人物達は、多かれ少なかれもっともな理由から、あなたの洞察力と学識とが行使されるあの不思議なバベルの塔の中に小部屋を頂く名誉を内心熱望する権利があります。ですから、この人物達をあなたの好意の庇護のもとに置く夢を捨てたり、そうした誘惑に逆らったりどうして致しましょう。

どうかこの献辞をお受け下さい。これはいうまでもなく、私の最も率直な賞讃と最も深い共感の証なのです。

パリ、一八六〇年六月

シャルル・バルバラ

原註1 セネカ「魂の平静」

翻訳

ある名演奏家の生涯の素描

一部

おお、崇高な歌よ！…実に不思議ではないか
この羊の腸が魂を人体の外へ運び去るとは…

シェイクスピア[1]

通りから通りへと、一人の老人が影のように家並みに沿って静かに歩いていく。高い身の丈が描く曲線のため、彼は廃墟の真ん中に立つアーチの残骸を感じさせる。灰色の大きな巻毛が頸の上に垂れかかり、深く刻まれたアラベスク模様のしわは額に畦を穿っている。蒼白い顔は一面穴と角だらけで、靄が眼窩を満たし、大きな鼻の隆起は、絶えず痴呆の薄笑いが漂う唇に陰を落としている。頭を垂れ、四肢は重く、しかとはわからないが何かをぼんやり考えながら、彼は歩むのではなく、足を引き摺っている。痩せこけた身体にもたっぷりしているとはいい難い、見るも哀れな不調和色の衣服の下には、生活の糧を得る道具のヴァイオリンと弓とをどうにか隠している。影の影、一人の女が距離をおいて後からついてくる。かば

かりの逆境が孤独であることは稀である。彼と同じように頭を垂れ、同じように陰鬱な悲しさを湛え、また同じように哀れな身なりの彼女は、憐れみと優しさに燃える眼でじっと彼を見守っている。我々が、心を揺するその悲痛さから逃れたいと思っても詮ない。名づけがたい貧窮の重みに身を二つに折り曲げ、界隈から界隈へ、四辻から四辻へと絶えずさまようことになってしまったこの哀れな男は、かつては王立音楽院（コンセルヴァトワール）でロドルフ・クロイツァー[2]の輝やかしい弟子の一人であったのに、今では実際何という面影を残していることか。

彼の理性が失意の下に埋もれてしまったエピソードを理解するには、その出生と生立ちに関するいくつかの詳細がきわめて重要である。父親のアントワーヌ・フェレは地方で細々と生計を立てていた。それは腕の良い楽器製造人であったが、音楽芸術、あるいはむしろそれ以上に、芸術家に対する彼の心酔ぶりは狂信的性格を帯びていた。[3] ある出来事はその狂信ぶりを示すものである。彼は楽器、道具、子供、妻をやっと容れることができるかどうかといった大きさの家の中に、無理をして優雅な一室をしつらえていた。そしてこの室はめったに空くことがなかった。次々にその室に滞在した著名な音楽家皆のいうところによれば、それは大きな驚きであった。ここで専ら大切なのは、熱狂と虚栄心とが、物質的利益に対するあらゆる強い関心を窒息させている、一人の律儀な男の性格を描き出すことである。いくら先行きの危険があろうと、いかなる予測も彼の欲得を離れた性格を治すことはできなかった。家に芸術家を招く名誉を諦めるくらいなら、そして食卓で彼らに見（まみ）え、おしゃべりをし、彼らの話を聞き、ときおり彼らから息子がレッスンを受ける喜びを諦めるくらいなら、その前に前後の見境なく何度でも破産していたことだろう。

見栄などは彼の欠点の最も些細なものでしかなかった。彼は感情的で、激しく、執念深く、芸術家を相手にしているとき以外は矛盾に耐えられない一徹な性分で、とりわけ、抑制のきかない暴言を吐いては、

ぞんざいな態度と断定的な口調と辛辣さとで、絶えず積み重なる反感を買っていた。夕暮れになると彼の一日の勝利の刻が到来する、すると彼は薄暗い店の奥に腰を落ち着け、妻と子供はともかく、それ以外にも、口をぽかんと開けて彼の話を聞く二、三人の聴き手を前にするのだった。彼は音楽を口から出まかせに論じたり、知り合いの有名人について、彼流に脚色したり架空の色合をつけた逸話を物語るだけでは満足せず、自分の客達を点検し、ある客達には皮肉の銃弾を連発して穴だらけにし、他の客達に関してはこの上なく侮辱的に自分の考えを述べた。しかも遠慮会釈なく、自らの無遠慮が人に迷惑をかけることなど全く気にもかけていない様子だった。客が彼の世話になるのであり、客の世話になるのは彼ではないかのようだった。彼は自分の意見に異議を唱える人の楽器は、いくらお金を貰っても修繕することを承知しなかったが、お世辞たっぷりの田舎のヴァイオリン弾きのためにはいそいそと修繕してやり、彼からは決してびた一文受け取らなかった。最後に、何と驚くではないか！　彼は貧窮に陥っているというのに、買手が商品の水準にないという風変わりな口実で有利な取引を反故にするなどということもあったのだ。

彼が自慢しようと思わないものにこそ、まさに彼の真の美質があった。以下にお話する椿事は、目撃者である息子を除けば、絶対に誰にも知られていないことだった。ある昼下がり、そのおやじは店の中をぶらぶらしていた。と、そこに突如、一人の若い外国人が入ってきた。埃をかぶった衣服から、彼が馬車から降りてきたことが推察された。眼は険しく、表情は動顛していた。彼は両手にヴァイオリンのケースをかかえていた。ふくらみの部分が壊れたケースの底には、およそ目も当てられない状態の楽器が横たわっていた。もはやブリッジに支えられていない弦の下では、緒留めと指板の間で、魂柱の一方の先端が姿を現わしていた。それは内から外まで胴を貫き通して嘆かわしいぎざぎざの傷口を作っていた。この有様は、ヴァイオリンの形状がほれぼれする心地よさで、その色がまばゆいばかりの輝きを放っていたので、それ

だけにいっそう心を痛ませた。それは疑いもなく高価な楽器だった。[4] 楽器製造人が念入りに傷を観察している間、外国人は涙にむせぶ声で事故の顛末を語った。彼は安全のため、ケースの上に重い物が乗らないよう、ヴァイオリンを荷物の一番上に置かせたのだった。不運にも馬車には荷物が積まれ過ぎていた。馬車が飛脚事務所のアーチの下へ速歩（ギャロップ）で駆け込んだとき、丸天井のくさび石が激しくヴァイオリンに喰い込み、文字通りそれを押し潰してしまったのだ。青年はつけ加えていった。自分はスペイン人で、幸運を追い求めてパリに行くところである、自分の楽器に期待する以外に他の財源は何もないのだ、自分が予想するように、もし哀れなヴァイオリンが蒙った災難が取り返しがつかなければ自分はもう万事休すだと。

フェレはじっと破損の大きさを見積もっていた。彼は顔を上げて青緑色の眼で青年芸術家を注視し、元気を出しなさい、傷は手当てができないわけではない、それを証明するには四、五日で十分だ、といった。

スペイン人は、疑念と焦燥の裡（うち）に、続く数日間を数世紀の永さにも感じた。彼は約束の時刻より随分前に、息を切らして狂人のように楽器製造人の家に飛び込んだ。「ところで？」と消え入りそうな声で彼は尋ねた。フェレは箱を開け、無傷の楽器を見せてそれに答えた。青年はそれをしっかりと掴んだ。暫くは唖然として物もいえなかった。「僕をからかってるのですか！」彼は突然叫んだ。「そうお思いになりますか。」楽器製造人は皮肉っぽく尋いた。「いや、いや、これは僕のヴァイオリンじゃない！」ますます当惑して外国人は繰り返した。

実際、アントワーヌは一種の奇跡をやってのけたのだった。彼は傷口を繋ぎ合わせるに留めず、さらに、数多くの破片、その多くは針と同じほどに細かったのだが、その破片を集めて、それらを一つ一つ細心の注意を払ってしかるべき場所に貼り合せたのだった。そして、技巧に劣らず根気を要するこのモザイク作品はかくも完璧に成功したので、それを知っている人の眼でさえ、ヴァイオリンの胴の破損個所を見分け

ることができなかった。

外国人の喜びは限りなかった。「せいぜい器用な職人しか見つかるまいと思っていたところが、」と彼は感激していった、「偉大な芸術家に出会いました。」彼は財布から五ルイ金貨を取り出した。「こんなに僅かしか差し上げられなくて、私が恥ずかしく思っていることをお信じ下さい。」彼はつけ加えた。「私の讃嘆の気持は申し上げるまでもなく、心から千フランも差し上げたいほどです。あなたは私の命を救って下さったのです。」――「あなたのお金は取っておおきなさい、」楽器製造人はすぐ静かに答えた。「旅をするのにそのお金は必要です。」スペイン人は大きな眼を見開き、この拒絶の意味を探っているようだった。「もし私をどうしても喜ばせようとお思いなら、」とフェレは即座に答えた、「一週間ここに滞在なさって下さい。拙宅に泊まって食事を御一緒なさって下さい。私の息子に少し助言をして頂くだけで結構なのですが・・・」この言葉は最も秘められた心の奥底まで彼をよく説明している。

しかし、この風変わりな男の一人息子はなんと父親に似ていなかったことか。彼を一本の頑健な木の、病気にかかった枝に例えるなら、不幸にもこの比喩（イメージ）はもっともすぎるほど根拠があった。熱で狂った頭脳のみが錯覚を抱くことができた。子供というものは、いつか彼がつける花や果実の芽をもって生まれてくる。稀な例外を除けば、子供は、後に人間のいかなる階級（クラス）に属することになるかを最初から予告している。意志力や気力や情熱は獲得されるものではない。それらは、火山の地下深くの火のように少年の胸に隠されていて、絶えず煙や閃光によってそれと知れるものである。よく観察すると、少年フェレはいわば死火山でしかなかった。彼はあまりにも虚弱（ひよわ）で無頓着で無気力なので、三、四年ほど沈滞して過ごした中学（コレージュ）時代には早くも仲間達皆で腑抜けのフェレという彼の特性をよくいい当てた芳しからぬ渾名を付けた。この無気力は嘆かわしかった。人々は彼について最も悲しむべき予言しかできなかった。ところが父親はそ

こにまさしく自慢の種しか見なかった。生来の専制的な性癖に忠実な彼は息子に対して、彫刻家が、どんな形にもどんな押跡にも変えられる用意のできた蠟の雛型に対するように、振舞った。彼は息子を捏ね回して、自分に似せて造形し、自分の思想と偏見、つまり、自分の気質と情熱とはいわなくとも、自分の野心的な願望を彼に吹き込んだのだ。よく吸収する柔らかいスポンジのような性格の子供は、実在人物に関するばかげた風説に育まれ、乱脈と隣り合せの無私無欲の光景に絶えず驚き、人生に関するこの上なく歪められた観念と、芸術に関する最も誤った見解と、芸術家に対する無分別な熱狂とに滲透され、あらゆる事柄が、いうなれば、まるで土中のはまむぎのように、彼の中に根を張って繁茂した。彼はまた、脅やかしに屈し、叩かれるのが怖さに作り物の敏捷さを備えるまでになったが、父親はそれを活気だと思っていた。

音階の七つの音符をやっと片言でいえるようになるや彼は急いで両手にヴァイオリンをもたされた。生まれつき痩せてすらりとした特質、長い腕、しなやかで敏捷なほっそりとした指がこの楽器の演奏に幸いするとしても、一方で彼には、虚弱で怠惰な頭脳、物分りの遅さがあり、それ故彼は不断の深い勉強には不向きだった。そればかりか、彼は十年間というものソルフェージュの老教師に騙されるという取り返しのつかない不幸に遭った。無知と因習に身を捧げていたその老教師はまさしく彼に何も教えなかった。だから彼はとにもかくにも指と弓とを動かしてすでに困難な協奏曲を演奏しているのに、相変わらずごくごくやさしいソナタのパッセージを、正しく拍子をとって初見演奏ができないでいた。知識の無い父親は平気だった。こうした成長の中に何ら異常なものを看て取るどころか、腕組みをして、不安気もなく、それを見物していた。熱に浮かされて生きているこのお人好しは自分が考えているのだと思っていた。なぜなら彼は絶えず夢を見ていたのだから。彼は自分の息子をオーケストラの楽員という身分に甘んじる必要を

なくすための解決策以外、他のことに関しては雑然とした考えしかもっていなかった。例えば、演奏家と作曲家とを同列に並べ、天才演奏家と演奏の名手とを混同し、要するに、明確でない漠然とした野望を抱いて、自分の息子がモーツァルトのような人物になるためには、望みさえすればよい、破産さえすればいいと信じ込んでいたのだ。

いつの間にか、この虚弱（ひよわ）な青年がパリに赴き音楽院（コンセルヴァトワール）の寄宿生となる日がやって来た。(5) まず最初、満場一致の歓迎の的となった彼は、驚くべき自在な演奏力で教授達を讃嘆させると同時に、その忌まわしい教育によって彼らをひどく悲しませ、皆から基礎クラスにせっせと通うように助言を受けた。実際、彼は従順にそこへそっと忍び込んだ。だが、高い背丈とミスとをからかう子供達とごっちゃにされる恥辱から、彼はほとんどすぐさまそこから逃げ出した。指の巧みさが勝ちを制した。楽器に関する進歩はやはり速いという他なかった。六年ほどのたゆまぬ練習の末、コンクールに参加することを許された彼は一挙に二位を獲得した。翌年のテストは彼にとって真の勝利だった。しかしながら、音楽家としての知ってのとおりの無能力にもかかわらず、このとき与えられた一等賞は彼にかろうじて束の間の陶酔をもたらしたかどうかだった。それを理解するには父親の手紙の次の条りがどうしても必要である。「お前の賞は記憶に留めるだけにしよう・・・全く別の人間の野望なら満足させるようなものも、わしの息子には前奏曲（プレリュード）、幸せな予兆の始まりでしかあってはならない。」環境が変わり遠く離れて暮らしているにもかかわらず、彼はもっぱら父親の夢想の影響力でのみ生き続けていた。そればかりか、最初の刻印は、木の幹に刻まれた文字のように、彼が成長するにつれそれに比例して魂の中で拡大され強固になっていった。年齢は量に関してしか彼を変えなかった。彼は結局のところ相変わらず同じ人間であった。自身に固有のものは何一つもたず、誰彼なく人が押し付けるその場の思いつき、逆説、とりとめのない話をそのまま保存する正真

正銘の機械（ロボット）であり、生得観念をもつ競争相手をいつももっともだと認めるためにのみ存在するかのようだった。そんなわけで次のことが完全に結論できた。徐々にではあるがついには彼を虜にしてしまう夢、哀れな魂が懸命に救済しようとしている自尊心、相変わらず彼をますます病身にする熱、そしてついには彼の心に侵入する確信、自分の裡には強烈な個性的素質があるのだというあの確信、これらはつまるところ、年老いた楽器製造人の夢、自尊心、病気、確信に他ならないのだということが完全に結論できた。だから父親が単なる学校の成功としかみなすつもりはないと主張する成功にどうして彼が感動しただろう。

それに、彼が自分自身の霊感（インスピレーション）に従ったにせよ、局外者の一時的感情に従ったにせよ、そんなことは大したことではない。後に、何より驚くのは、生まれつきであれ借りものであれ、固定観念というものは、虚弱な人間にさえ、情熱と粘り強さと活力と激しさの火力を掻き立てることができるということである。この意味でフェレは模範的な人物となるのだ。頭の中ではまだ漠然とした輪郭しか描いてはいないものの、何者かに成ろうというただその一念のみが、虚弱さ、無頓着さに絶えず打ち勝ち、一日も欠かさず、朝から晩まで想像を絶する苦役に服する力を彼に与えていた。それが何であれ、一つの芸術において、優越性は果敢な粘り強さと引替えにしか得られない。並のヴァイオリニスト達より少しばかり上手にヴァイオリンを演奏したいと熱望する人間が身を委ねなければならない労苦の大きさを知って人々は唖然とする。非の打ちどころのない正確さを追求し、人間の声の音量、丸（まろ）やかさ、柔らかさ、力強さをもつような響きを熱望し、演奏で、それが天性の才能であり、もはや永い骨の折れる練習の結果ではないと信じさせるばかりのあの技巧の段階を羨望するやすぐさま生が彼の渇望に背く。完璧とは、騙される人々やその犠牲者達をもはや何物とも思わないセイレン〔ギ神・舟人を美声で魅惑して難破させた海の精〕である。人は情熱的、熱狂的に彼女の方へ舟を漕いでゆく、彼女に近づく、そして彼女を捉えんとひそかに期待するまさにその瞬

間、彼女は水中に没して彼方（かなた）の水平線に再び姿を現わすのである。特に器楽奏者に対する場合には彼女の要求はそれといった明確な限度がない。彼女が課する練習の永さは際限なく、この練習の単調さは最も頑健な精神でさえ狂わせてしまうだろう。つまり、幾分でも知性を備えた人間が、楽器の練習と呼ばれるこの挽臼を挽くことにどんな風に甘んじるかを理解することはそれほど容易ではない。骨が折れうんざりする上、シジュフォスの罰〔ギ神・地獄で、山頂に上げてもすぐ転り落ちる岩を永遠に転し上げる刑罰を科された〕にも比較されるこの労苦に、楽器製造人の息子は身も心も捧げていた。こうして彼は、およそ十五年間孤独の中に閉じ籠り、あらゆる楽しみを絶ち、一つの目標、実は不幸な目標を追い求めて、他の職業であればどんな職業でも十人分の地位を保証するのに要するような忍耐力、不屈さ、巧みさ、勇気を消耗することになったのである。疑念も、失望も、苦痛も、嫌悪も、彼を動じさせたり後退りさせるどころか、永い間、熱意を倍化し、彼の疾駆をさらに速めるような刺激剤としかならないであろう。

乱費と無秩序とが父親を次第に不如意に導いていった。以来老人が息子を援助するには自分の生活を犠牲にする他はなかった。自分はますます厳しくなっていく節約に努めても、まるで不十分な下宿代を送ることしか叶わなかった。哀れな奴さんは屋根裏部屋に住み、十分な食事を取らないばかりか、いつも乞食のような身なりをしていた。せめて彼がこの貧困を我慢しなければよかったのに！　だが彼はそれをあまりにも苦に思わな過ぎた。彼はそれに慣れ親しみ、ついにはそこに楽しみを見出しさえしたに違いなかった。生まれつきではあるものの、教育によって成長したこの無頓着は、治癒し難い慢性病のスケールになりつつあった。人々はすでに彼の中に、自分自身の面倒を見られず、一生子供のように監督される必要のある、ぼんやりした、何かに心を奪われているああした人々の一人を認めるのだった。それではまだ足りなかった。父親はその病を過度に治そうと決意しているようだった。彼はひどい投げやりを頑に押し通し、

眼は未来の幻影を凝視して、倦怠の徴候が認められると信じた息子に返事を書いたものだった。「多分、わしの疑い深い傾向がこんな折りにわしを惑わしているのだ。お前が失意を味わっているなどとは到底想像できない。わしが何度も繰り返しいったことを絶えず思いおこすがよい。生活の資を得ようと急いではならない、芸術を商売にすることに同意してはならない。勉強をする人間の未来に雲はない。才能を身につけること、それは確かな富を蓄えることなのだ。お前がもう苦しむことに疲れてしまったなどとんでもない！　もしそれならお前はもうわしの息子ではない！　生活のうち、お前にはばらの花を譲り、わしには刺を取っておく。わしを打ちひしぐ貧窮のほんの一部しかお前には味わわせていない。お母さんは病気で、商売はうまくいかず、借金は日ごとに嵩んでゆく、家は至るところできしむ音を立てて崩れかけている。だからどうだというんだ。わしは、乞食になっても一歩たりとも退くまい。お前がオーケストラの下手なヴァイオリン弾きになるのを許すくらいなら、その前にわしの身体はうじ虫の餌食となろう。このことをよく記憶に刻み込んで、お前の身体を貫き通すほど深く頭に叩き込むのだ。というのも、わしは数限りない侮辱の恨みを晴らさなければならいのだ。お前は名を成しなさい、さもなければわしは恥と絶望の中で死ぬことだろう。」父親の一言だけでフェレは深い淵にもすぐに飛び込んだだろう。だからこの種の手紙を数通読んで彼の胸は張り裂けそうだった。というのも実際、彼がすでに受け容れていた能力を超えた務めは、天職のように彼を虜にしていたのだ。

宿命の存在を信じさせるあの様々な偶然のひとつによって、一人の若い女性が彼の隣の屋根裏部屋にやって来て住んでいた。親戚もなく、いかなる種類の人間関係もなく、いつも孤りきりの彼女は、昼間のすべてと夜の一部を働いてやっと生計を立てていた。彼女の顔を冷静に分析すると、彼女はちっとも美しくはなかったが、顔を照らし出す無邪気さと優しさと清らかさは、まるで美しいのと同じくらい、見た目に

快く感じさせていた。体格の良い中背で、健康に恵まれ、額、眼、唇、足取り、物腰の中には、何物も疲れさせることができない忍耐力と思いやりに満ちた、あの母親の優しい情愛の深い穏やかさを漂わせていた。献身的に努め、他者の中で苦しみたいという欲求が否応なく彼女を弱者の方へと引き摺っていくと同時に、また彼女からは抗い難い魅力的な美徳の真の流体が発散していた。(6) いくつか年下のフェレと彼女との間には取り決めもなければ宣誓もなかった。かろうじていくつかの言葉を交わしたかどうかだった。彼ら自身にとってさえ全くの謎だったが、性質の同一性に基づいた彼らの関係は、同じ一つの斜面の水滴同志の関係同様に、単純に形成された。天使のような無邪気さの中で彼らを満足させるには親密な友愛だけで十分だった。精神が狂って現実離れをしたフェレが練習に熱中する一方、彼の伴侶は第六感が知性の不足を補い、――それに彼女は愛することと行動することしか知らなかった、――子供に対するように彼に気を配り、いわば秩序と得も言われぬ平穏と香(かぐわ)しい雰囲気とで包み、彼はその中で天国にいるかのように呼吸していた。この健康によい温和な生活療法は幾週、幾月にもわたって矢のように飛び行く日々の跡を刻みつつあった。フェレは自分の幸せを自覚していなかった。この平和な家庭生活は彼の真の天職だったのである。それは彼にとって次第に強い魅力を持つようになり、心の底にまで忍び込んでそこに根を張る、眼に見えない絆で少しずつ彼に絡み付いていった。突然彼は身震いし、夢から覚めたかのようだった。数日にわたる熱にとりつかれたような熟考の後、悔恨が心に侵入し、あらゆる休息を奪った。文字通り燃える炭火の上に身を横たえている父と、労苦と窮乏に疲れきった母のことを考えると、彼は自分が愛される喜びを罪と同じくらいに咎め、良心の咎めに打ち勝つことができず、良心に背く快い関係を断つ決心をしたのだ。この闘いがどれほど苦しかったかはいい表わせない。問題は、彼の心の中でうち震えるすべての感じやすい琴線を一筋一筋断ち切って再び孤独の中に陥ることだった。だが、うっとりとさせ永久に消

えることのない思い出のために、以後彼はこの孤独をおぞましく思うことになろう。彼はともかくその犠牲を遂行した。伴侶には一言もいわず相談もせずに、――しかし彼女はすべてを察し、何も知らない振りをしていた、――彼は他の屋根裏部屋を借りてこっそりと引越し、胸は悲しみに塞がり、眼には涙を一杯ため、喉は嗚咽に詰まりながら、愛しい女、真に彼の骨の髄、血管の血、彼の眼の光、彼の魂の心髄のもとを突然去ったのだった。

人々は、様々な決まり文句で、うんざりするほどこう喩えてきた。人生とは少しばかり蜜の混入した一杯の苦汁であると。この比喩は多くの人の生涯には適わしくともフェレの生活にはまさしく不適切な表現だったろう。彼の唇は、飲物がますます苦くなるのを知るためにのみ杯に濡れるのだ、といってもよかった。こんなわけで、遂行したばかりの犠牲から生まれた陰鬱な悲しみと彼がまだ闘っている折りも折り、耐えがたい酷い便りによって彼はひどく心を痛めた。あまりにも自らのショックに気をとられ、他人の感受性など気にかけていなかった父親は手心も加えずに彼に次のような絶望の叫びを差し向けてきた。「息子よ、お前のお母さんは危篤だ！[7] 彼女は、錯乱の中でお前に会って接吻する最後の慰めを求めている。痛ましいことだ。わしとともに酷い運命を呪うがよい、しかしお前が瀕死の人間のこの願いに応えることは許されない。旅はおまえを勉強から引き離すばかりか、わしが送ってやっている僅かばかりの生活費の一部を奪うことになる。だから気持が挫けないよう十分気をつけなさい。お前のお母さんは誰にも共通の定めに耐えているのだ。手紙に気持を書くだけにしなさい。お母さんの臨終の酷い苦しみを和らげるだろう。そして我が愛する息子よ、さし当たって、苦しみを前にして動じないようにしなさい。揺るがぬ意志をもちなさい。何物もお前を阻止しないことを祈る、勉強しなさい！[8] わしの敵どもは喜んでいる。その数は絶えず増えている。お前に抱いている希望に支えられていなければ、わしはこれ以上戦い続けること

ができないだろう。」この不幸は前から分かっていた。だがフェレはこれを聞いて危うく気が狂いそうだった。彼は父に、いわば物質的にしか従属していなかった。逆に母は彼の愛のすべてを所有していた。母のしてくれる世話、変わらぬ優しさ、気高い献身を思い出すと必ず感動した。この母は、彼自身だった。彼女がいない人生はもはやいかなる魅力もなかった。彼は眼が溶けるばかりに涙を流した。悲しみの激しさは心を締めつけて砕いた。「お母さん、」と錯乱した彼は叫んだ、「もうお母さんに会えない！　もうお母さんに会えない、お母さんの長い苦難を僕がどんなに辛く思ったか、どんなにお母さんを愛したことか、今もどんなに愛してることか、お母さんは永久に知ることがないのだ！　だけど、僕はお母さんのためにだけ勉強していたのだ。僕の唯一の願いは少なくとも数日の喜びをお母さんに上げることだったのに・・・ああ、お母さん、僕の夢といっしょにお母さんは勇気ももって行ってしまう！」この傷は永久に癒されなかった。無気力にする悲しみが魂に浸透し、知らぬ間に無気力と無秩序とを増長させた。何物も挫くことのできない影響力、父親の影響力のみがこの衰弱に歯止めをかけることができた。老人を思い出して彼は間もなく我に返り、不屈の気概を奪い立たせた。彼の活力は嵐に変わった。もはや一日が十分な時間をもつとは思われなかった。数冊の楽譜を手に夜の一部をさらに猛烈に勉強した。熱に浮かされた、いわば凶暴ともいえる激しさで練習する彼は、夜、森をよぎってさまよい、恐ろしい幻影の虜となって歩みを急ぐ男を思わせた。ときに歩みを止めるとしてもそれは祈り、泣くためであった。自らのぐらつく力と過ぎ去る時間とを感じて、いい表わし難い激しい不安に襲われた彼は完全に我を忘れて叫んだ、「おお、せめて彼女の名誉と慰めのために僕が十分に生きられますように！」

喪によって暗く沈んだこうした日々の只中で、貧窮が容赦ない苛烈さで老人を圧迫しつつあった。人々は同類の親和力を知っている。災難は災難を呼ぶ。それはちょうど他の分野の事象で磁力を帯びた矢が火

花を引き付けるのと同じである。[9] 結局彼は妻の死が投げ込んだ昏迷から回復しなかった。彼は商売の不振から債権者達の寛大さに甘んじざるをえなかった。息子にこの最後の破局を告げている手紙は、彼が運命と呼んでいるものに対する呪いに満ちていた。至るところに敵ばかりを見る不幸な性格についてはいうに及ばず、彼は、諸原因が諸結果を生むことを望まないああした人々のうちに数えられなければならなかった。[10] 我々は意識的あるいは無意識的に一連の過ちを犯し、そこから我々を打ちひしぐ悲惨事が生じ、その後の日々を天や運命を呪って過ごすようなことがままあるものである。結局、ほとんどの場合、運命と宿命とは、我々の自尊心をいたわるためであれ、虚栄心を傷つけないためであれ、根拠もなく創り出された言葉に過ぎないのだと思いたくなる。だが、父親のフェレは、想像され得るあらゆる人生の浮沈も彼の美徳を揺るがせるに到らなかったという点でとにかくほろりとはさせた。「結局のところ、」と彼は叫んでいた、「わしの破産[11]は不名誉をもたらすものではない。奈落の底のわしには純粋な良心が生き残っている。そして敵どもが何といおうと何をなそうと、人々がわしの値打ちを認め、非の打ちどころのない誠実な男だと声を揃えて言明するのを妨げることはできない。だから、お前は恥ずかしがることはない。わしの凋落はお前を打ちのめすどころか、活力を奮い立たせるに違いない。わしがお前だったら、それによって帯電し、[12] 才能を豊かにするだろう！　わしの不幸が踏み台となってお前に役立つことを祈る。それ以上は何も望むまい。命などどうともなれ！　名だ、名を成しなさい！　いつの日か、いつのときか、敵の喜びが苦しみと変わるのを見んことを！　そうしたらあらゆる苦痛はかき消え、わしは陶酔のうちに死ぬだろう。だが、いやはや！　急ぎなさい！　一秒たりと無駄にしてはならない！　仕事と不安がわしの身体を擦り減らしてしまった、精力はわしを見捨て、わしの老いにはもはや一縷の望みしかない、そしてその一縷の望みはお前の手中にあるのだ。」

（続く）

作品註

頻出する文献 *Chamfleury, Souvenirs et portraits de jeunesse*, Paris, Dentu,1872/ Genève, Slatkine Reprints, 1970 には略記号 *Spj* を、KAMEYA, Nori, *Un conteur méconnu, Charles Barbara 1817-1866*, Paris, Minard, 1986 には *KCB* を用いる。

1　「空騒ぎ」、二幕三場、ベネディックのセリフ。

2　Rodolphe KREUTZER（1766-1831）。フランスのヴァイオリニストで作曲家。パリ王室礼拝堂付楽長。「四十のエチュード、又の名ヴァイオリンソロのためのカプリッィオ」（一八〇七）は有名。ベートーヴェンは「ヴァイオリンソナタ作品四七、一名クロイツァーソナタ」を彼に献じた。

3　バルバラの父はオルレアンで弦楽器製造業を営んでいた。友人のシャンフルリは、*Spj*（『若き日の回想と肖像』）の中で、頭で作り出した作品の中に現実の人物像を断定することほど難しいことはないとしながらも、この作品のいくつかのパラグラフ（作品翻訳本文十二頁十八行目―十三頁十三行目、二一頁二行目―十三行目、二三頁十六行目―二四頁五行目）を引用し「この老音楽家の肖像は著者の父親といくらか関連するものを提供しないだろうか」といっている。

4　名器に対する強い関心と言及については『感動的な物語集』*Histoires émouvantes*（1856）の中の短篇「音楽のレッスン」«Une Leçon de musique»の中にも見られる。

5　バルバラは恐らく一八二九年十二歳でパリのルイ・ル・グラン中学校に転校した。父親は兄のピエールをドイツにやってピアノを勉強させたように、彼をもまたヴァイオリンの勉強にパリに出したのではないだろうか。

一八三六年にパリ高等音楽院（コンセルヴァトワール）に一時その足跡を見出すことができる（*KCB*, p.9）。

6　精神的なものの流体説は古来存在したが、作品のこの少し後に現われる磁気に関わる言辞（註9、註12）などを考えると、バルバラは「美徳の真の流体」といいながら、すべての生物は「磁気流体」の力に影響されるという、アントン・メスマー（一七三四―一八一五）の動物磁気説の流体が念頭にあった可能性もある。頭をかすめた、といった方が妥当かも知れない。親友のボードレールはE・A・ポーの「催眠術の啓示」を訳している。一方、バルバラが好んで読んでいた作家には、ポーは勿論、メスメリスムに強い関心をもっていたE・T・A・ホフマンやバルザックなどがある。

7　母はオルレアンで一八四三年八月二十日、五十二歳で死亡。*KCB*, p.14を参照。立会人は兄のHenri Pierre Barbara他。Louis-Charlesの名は無い。

8　シャンフルリは父親の手紙の冒頭からここまでをSpj, p.206で引用し、この父親の中にはブルータスがいる、そしてバルバラがこの様な手紙を書いたことは彼が非常に強固な性格であることの証拠だといっている。

9　註6　参照。

10　ここにはバルバラの現代的な科学的論理思考が窺える。

11　*KCB*, p.17. Lettre de Barbara à Léon Noël du 1er sept., *KCB*, p.188.

12　註6　参照。